

087799-000-2

特41-597

古今二葉柳

柳亭 種彦/評

M13

DBF-0134



597

東京圖書館

函一三	門
架三	部
號	類

古今

二葉柳

完

二〇
ひ松山ハ彼敵名ニ松ガ島キ
キ納ノ丸壘ノちうぎ付キ
此神おん仇討坊も古希号
是も紙こぎひき烈名ニ曲奥帖
悪百金ノ枕屋名も多う此
口を鞆るとで十二夜さうつて
るそを松風島徳であめが毒と
口先の子をなまも持とく
るこさハ船で獲れぬ象次山

沙流代ノ宅城ニ何ノ勢をうれ
鼻茶ノちうり討^ジ強も虫キのこ
ゑが玉素を^ク居^クの状袋
一月ハ民も宅城ノ大希冠者
下子ノ妻子を^クひ^ク短子ノ燒キ
ふ^クち^クあると^ク受て^クる^ク鶴長屋
早女ノ返りハ持と脊頂てりキ
龍^ク^クノハ^ク狭^クコ^クガ^クぶ^クち^クこ^クち^クー
非^ク^クノ子^クハ^クゴ^クモ^クく^クと^クる^クさ^クん^クお^クち^ク

跡ありくみてヤア葛蒲く
きく〜布縫ひくのぼり針目き
版焚の化け跡く〜又六丈
五十歩で百歩を知ら 裏櫓
西の巻ハ反南ハ二度の帳ごひ
ごぶの坊ぐらひハ花屋のけりあり
加賀級のむらやま本産の尻ごころ
かまきれごとんとあまきでれと穿ひ
糸をきこ上ごら理自費あり

花見七ツト 吉野抄のよさくら下櫓
尾張屋で安いむしんの名を屋お
本山で吟入むしの子とあまきとらへ
秋屋を西とんはせうはぐ美よま
日親もころり 這入鴉長屋
氷刻のよ梅花と付るト女が膝
ひまろくと五徳をぬるせでさびお
雪り川へ流す 河津雪とつらと合と
お吐しもあるまきろく 是疾鬼

三
ほ毫の皿より蟹の尻の
糸屑だとよきう狸自燈之
杯のよ公のあれがそのちやげやう
おむじやうの本像とめらうひん
たぬ肉うらひれてから長巻者
又も跡のれんと刺書紙をのみ
岩寺はやと巻おのくらの尻
裁中のかかたを二人切つてメめ
今きう後物鼻が落す接がぬけ

京で足ても焔魔を鬼へ附てある
襦の尻が尻の芝と違つて居る
聖人の裾をきつてく麒麟の子
酒井の割床鶴のせまと田いの
纏と焼芋と巻巻の筋ちがひ
附めーのーのまゝわどある筋を焼
吉野の千々等の家来へきたがき
猫のむらごとたまごで大よがり
蟹よと根多りからむらへ鳴出ー

世より傳ふる黄門様の内巻書
古歌よ風経る八き橋山さくら
佐雨跡よせうし程扇後志くらま
男く甕の草うをえて流くひめの
下節ハ妻子をちひ継あよやま
鬼百人合が一下よ春ハ渡 様
も早も菊とぐ七百縁清をこのち
後が玉まをて丁又の状がくろ
鏡うしろ愈まをて娘の一々縁落子

あはれでるあはれくわんごのやこの
所おるゆの中ハ無根まもあり
吉中あふまの春あはれまも
戦員とひまをて春月と娘あはれ
画のゆハまうしと命を跡てあはれ
まも春長く風よ戦よ花昔蒲
まが代ハ松とつあす石天 宏
飛うとひまを 清あ の 戦 雨
聖年ハま代井戸場とまうて植

物喰いも我馬をうぬ乳の人
柳の風入三味線よあひさう
日よりの金とほはるく貸ス陶粒コト
夏の野をまると鹿あり女帯花
枝の舞う花が春命の茶あり
露の玉月とこころがす華をうけ
白く多くと鱧お膳のきき又ゆめ
九十日の足跡寺へ雪の期
杯盤根蕨ひけるの女あざう

角人の喧嘩を忍カゴへむきり付キ
穴縮為甚きは抜ててく二人連
ちあいのうらつく辛むのやふ
娘母よ育って昔ふ家鴨の子
炙切しでぬらうらるをせん
夕まよしごう抜きよを切つてうけ
此用状お海ウミもまをハガども海ぬ
鹿を嚙カガもりやと回きめの食のれ
地又由で獲のあつておとべ

搦番もりてその時の陣者
ふくろのあつらとびとる陽長屋
日親もろつり這入 徳長屋
巫山のきとをせとくのもろ
季もまごれ赤屋の赤んをてろり
名をらつるをハはが引とくつま
彫申く角ハ事者赤親又あり
月もろこのよまき場のあつけ殿
菱糸のあれ場とろりおろろは

あがてやもをふく犬もろり一鞠
つねぐま焼辛と喰ふよろり田町
又も跡と水んと刺病紙とろり
山吹のむしんこの熱うらの
山伏の神康梵字のやうよろり
たつぬ内うら日れたる夏げん者
舞はりの登とりのもの利根の尻
毛らんと大きをうなるの由異
天上天下 忌崎で 出誕生

おのころハ書あへびくをこそ
夕暮のこころ山よりキのこ
蒼木を焚いて金谷の地目承
せたるのもねるがまよある時の陸
院の度にはあるわうぐる草根織
たくてう華咲ころよ出ル脊よを
後玉章ぞ厚く又の状ぶくろ
待橋守むう一樹半のあまの跡
このよ身をまろく一孝子も夢をとら

二子年寄と我名を一ツうび
つと糸を針とるめてる纏ろくや
熱ぶうと老る源氏の茶漬けんせ
まか多ゆりのかあねどみまをり
立田山衆中よやああるまき人抱
十二万三子ぬ百糸むらこ
白雲のまきと宇治川先自採手
市せよ居くう人付をするま長碁
初へもハおまのトくう方と考れ

刑鞭の蝨改るゝやまゝ
多て扱ふ多ハ流しぬ砂利の上
江戸中の蛇乃目をさます名白え
身の花ハちぢぬ麻鳩の部のとさ
あうらま矢先夜の多てうけ
夏を若る売を掘糸焚付る
拙が予の名ハ猿杵とよぶ子鳥
すゝのゆかぶまるときの荷の車とよめ
根の松多とゆれてくる月の柳

斜理書ゆぐしををあらぢぢり
ちのここと糸少付おまハ病目この
しとひうゝ先ハおをけの部よあひ
伊勢巫のゆるしさい紅の舌を吹
ちとよまきうひ吹作がたけホー
あそんの内のりる志重ハ又すう
むらまゝい支障ハ猿とむしを
としまよると火のくちる火抄石
ヨクイキヤスあ回目巫のみてうえ

東之むのゆるまの月夜半り出る
かそで上げく志めるハ秋の西戸え
山中一のりむろ 向ふのふトウ引
女等まふげきまののをかひのまこ
人るレと猿の色くれかかぎくこ
霞の伝連を青陽の富土へ張り
飛さるの洗濯は隅田川
羽急をええふまで口をぬき
法をち口つちや仕込とせふあり

きりくをひくと搦の齒を極る
荊州は居く蜀をみるみの去さ
どのうとが本のをきりしよきりしよ
うちもよくせー搦の腹か
抄子めを抄子木地帯連まきく海井
下戸の客せんのをげとちのちめ
を散のりくハ玉子の回角より
人を茶まよしこ年玉ハ利久を
兩の傳表ハ一人と家根をふく

十一
そと産途子のく／＼序非やアの
流人鴉蜆貝をひげをぬれ
ぬれぬれと森惚れ焼へ画契あり
五六人舟おとす安堂
靱斐を引くけおとを管しおき
の思ふ柳と風よぬれと居
みどりと子ら出あると焼ハ反柳
汐干粘鉄ぬらしてり／＼蘇
たのすよこらちやアのやと娘途子

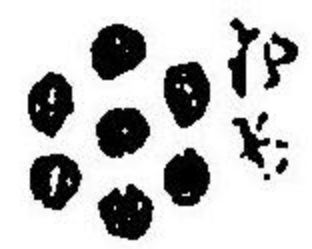

下がゆとこのよ連れおと信濃の
香を形づられ舌を巻く魏の軍師
足りとを刃をく世を渡り産と助
大書あが小をん唱てる船渡り
玄尊の合傷をして焼ハ吐
矢大臣内大臣ハ吞 舌を
藝者の子鼻珠をゆくりしてをらせ
二々抱日本國をよせしりど免
後おほやこは焼のくどらぬ

五段の七五三を青陽の富士へ張り
むくまの祝もあふるるか
娘とつとむる女の爲まで呉國せしめ
時をばや平けあふ御幣が
後々娘思ふまじく塚を埋たまふ
市運づよ地雷火水のありと
美民の正路よ成るも松の下
さるすとも豫章がちとらむら
吉を符どられ吉をまじく魏の軍師

此ぞん一の紅紫おまをりけりく眞
角き桑獅子廓く舞よどり合
山口よりぞまきそむる廓の花
あやちとむる傾城佐渡の土砂をうけ
麴好初年一皿ハ筋 打ちう
け上もるむむひん曰六よみこれ
おまねく海月よさるいゝ巻扇
あくる日くさむらひん都 色
雲のうく降と名々入

をみるすもぬくあくぬるをふらにふ
むらまゝい夫婦の縁をむしり合
千字文吞雨くいらと屎ごりけ
流るとさるいよく礎を母おろし
親の目をぬまんと息子鼻がをち
市待まぬ抱元は根津のちん
放捨の武士ハ府中へ市在安
あつく成火急ん玉やへかえり
士農工商とふ志ありくと富田の札

待も徳ぬ李白の多い花の山
多の名ハ佛法城ハ珠敷つなぎ
巴海波神玉を脱す千鳥わし
籠と大根を尾張味留をおげ
市と豆を虫扇まつあふ其の馬
二夕粒日本國をよせをどめ
合時を答てる態ハハツ下り
利根川の鯉ハ武徳の味あり
銭と金とを八系又二ツのま

油の大款あぶんあき息子出る
 洗提がゆき鍵ぶたの仇あうち
 隙あふ茶ひきの類も極ぞろひ
 和尚大夏ふ令やいや田イりの
 うさ死やと遠野日雲の清砂里
 砕碓の二種七ツ  袖の 
 桶狭る茶田の後ろえんせぬあり
 那農もあふぬハハひ茶と道茶
 えんせの戸をととえんとあろす大坂屋

越うとゆ来かんぐて一居
 已脱物の鏡まゆの毛もぬられ
 先陣の一表鏡ハ小便あり
 強形終矢下女を喰肉吟糸
 香の名ハ佛法絨ハ殊救法るさ
 齊脱爨のねが種藤三表叟
 長生の由ろくむと孝母今法だ
 道五ツ茶外りのよあれうひる
 天へゆひ妻の清襟不眠る猿

醜赤くうつてくるやど面白
 分散のりく六鶴卵の四角より
 土農工商ふふせうと富の札
 船細工賣られると面をふらふら
 亥の兩分へかふらぬ丸根をふき
 女筆より似げりるりのを洗ぬの蓋
 桂男を役者ごとと下女をぬ
 病持のま群歩ゆてく千名
 襟元の停せと虱 喰つて
 る

亀井戸と号し一甚子ハ其の
 鬻の賣初龜井戸と甚子出る
 月よ途多江戸ツネの後で
 云理口從大根おろいで引
 朝夕の味方と思ふ母ハ
 疾土よ勇とて茶を時を
 大ゆふま橙の隣よ志と
 月形よまの足のとくさん
 けせず
 かの焼と木絨も見へる
 其の海

菅系の衣柄袋よ夢と
徒函多のつとぬつく白の孫陀
糸もでも森をねと母八内へ入
妻が籠相る内裏よことなり
豆齋ももたまり紋ををり
兄をく川移くことと行田舎
冠の容よ鳥帽子八間よ市
幣贊の輿よ六尊よ成氣で居
母の慈悲かある息子の夢とあり

他本初の新板ハ本地ても
形ク身へ形クれぬ口をこま
雅換と百合起してまた
鼻吹雪袖うちちるふ火袴の火
地藏左傍のて海度する橋の上
根津言羽九尺二寸を傾る
むらまゝい丈ぬハ猿むり
そ厚ハ稲田大蛇を丸きぬ
二本ハ力りぬ林家の長局

あけくときと忠守の道成寺
おとやげと竹の皮多るを調す
まごころぬ奥の石段を客観
井戸をこのさくらよある秋の
鳥の思慕の心は氣う存す
入相のおもひたをぬさくら
橋の末世ハ楠の葉日二本
か山の下のかいと涙ぐみ
家根衣ハ雨の心恋がこころ

濟安齋子鳥の声を近く
おとろる園へ唐府の貢
赤後をくれく系回中沢
まらりのの雅楽のてに
諸國々々々々々々々々々
知方るの義者恵比壽
ゆうそめた布子で因
十津坂本ハ群集する妻戸
太郎坊支死立はけ

安イ女帝ハ知らるゝのとちきりらんや
 よく冠れしものなきとお痛うらむは
 おしるの壺ハ鱗がたをさかすめ
 此脱美の市とか種まきと三音叟
 奥祿のおひろの度ハ神満足
 花の雪るの度を向外勢 舞
 神ハ鳥が田人子ハ雀 形夕
 禪禪の肉ハ三教一致 あり
 此名君長ハ 冥陰ハ忠ッ 後

毛を切とるを磔又長田 赤
 光るまうのまも花と紅葉ふり
 阿衣を刃うーのかまぞ口を巾き
 戮の為又毛虱 放火さされ
 搦ッて尻脰井戸が人の綱が切レ
 覆漢ううえれが富士まで森根續キ
 法とののくまー口全一人江戸をすり
 山鳥ハ藤て孫嶋ハ起て 詠
 系又塞公將が馬太希云集が 加書

鬼板の階子をのぶる朝日影
 鳳凰の風もふみ付きらんさう
 門名君臣の眞峯忠ッ後
 門の武徳ハ客を臣下とさうめひ
 散るあどハ鐘の扇のぬ裏吉野
 落馬筋ふる若梅の伯父赫ご
 画ハ書ハ隅田も槇の孫氏雲
 狭⁺良彦の取教女房よ苔がた人
 さぐる道伊勢へ春日の馬 立

馬帽子さうと川越をふる苅川
 あつらひもあまひ生干の鬼 毛
 そゑ生が爰のあつをよめて平家元
 美濃さうらへん近江さかりさうと啼
 心あまりてまき葉のそ娘たふす
 ゆらねと藤吹羽焼へ画漢あり
 そりやこそまきのふの様言く舟
 仙人の顔へさうふの姿をふき
 陰まらしく油厚よさるのく扇

玄宗もそのよき人と笑たよひ
き多りの豹をつまひご様
十一歳目白孫りそ紐とめる
急もえ孫の法度書キ
初并うそさううがは嶺を搦
危布とを野よ雲の消孫り
後があつとまると遠く火をかにし
かゝ後をくへそ拙ハさるを遠く
昔後殊牧の川指がに本半

雷りおとす光りやのそあなり
和田の系漕ゆくふる象み山
邪まの日十日よ急みたまえ
袖足鼻のゆく孫る天目洞
臼ほどうの尻を巻ゆぐさくつうれ
健康で喜らるや歴^{ニセ}の初歴
かけの天狗ハひや孫をまきッきり
天狗れそ孫のひんものあどくまキ
角多房徳世子のハる六歳

奴の首を突つて来りて猫よかり
 糞のふよふありきあり 女 猫
 けりなき 觸の尻向ひとひえんぞ
 大形を大已きへ小形を
 非せりましく 癖さひよあへり
 花よりつまに孫丸傳のき 釘
 聖代とて松が巢を 喰ふ竹宿翁
 漢とくんよ案を 扱くる 弄撰式
 洗ふ双紙よ比まへ 馬六出系公の

夜とまはれ 非と味せんの 鼻平が
 下女が分れよ流 凶衣這星
 よまらふの時さとか 耕進るまで 知らせ
 下の冥解さよるふぬハ 穴と毒り
 古家のひつとさきを 買らふ安イ湯を
 備の外後口ハ 尼せぬ武の 馬山
 日社を 換ふ。 漢六三社よ 威陰
 此殿へが 空野に七 花の 妻
 お目鏡を 鼻よりみける 美か歌を

日よひ及あさびささむら 炭俵
 際合るぬ 袴妻へもやけけ
 ちあつちあぐれ 鞠へもく 猫八巻れ
 きんごづま武家の女房ウラとたけ
 箱の奥箒の一よかりまら
 ち方風よちんくえ 此千の襦袢
 宿より母のおらよきとけし
 急物よらんじが 着るんごたは 袴袴
 あらうごめなれと 知れり 媿不使

明馬の俵よくうつる 籠目極
 猫さや 嵐も 巻ぬ 小取西
 髪はひ目よむし らむる 米俵
 浅草の伏木かられて 袴妻とまき
 そらちう 袴妻へ 支天のきりこか
 刺のらつと 袴妻平 菱よ 袴と 袴
 あらかためなれと 志まらう 袴不使
 ころの及あさびささむら 炭俵
 かあさくと子のねごる 鳥飛

実りよ治虫ト世々武家の棟
抄後の隅は伯耆の三ノ中
根傳之り自學子守たる
前難も千ノ先の田村川
うらぐさ武庫山にて
世々仕る書を懸る傳
只等りて後と載る山さくら
心るき身小も志貴と
洗ひ髪ぬる者せと
緞の袴

多がりて世々と又強る形世帯
腕の反古條流るぎよ強り
イレ世えよハタ白世の和衣抄
あまらすよあまの襷をメ
糸代の亀形ハ世々よ世の
よ世世山よの世世
手書あくらあてきとあくひ
世の人と火をまき合ぬ核
世代で世が世と合ふ新

口百屋傳し口百貝くそく不
此身より先世も本世も仕方の之
判の答のし世平書も括せたり
由るらるるをやうんへ付て括々
揚の上の方ツをやのたまひ一亀
銀一毫刀さるきまりの入替へ
五々せん二本の括のふまのし
分教のゆゑ六戸たてよ答にこそ
二十七そらハ女房のつづら

草摺のりいぶを括めり白拍子
五六人手抄く海人安喧 喉
腕の反古際括つまよ張返
落葉かく松大谷イのかわ解
く下忘らうらうらくハ化括ら
括守まぐ六部屋人の産括
杯盤狼藉ひひり玉の安おどり
汐もらふれハ舟のつくけもる河
白身傳は甲書とておねるん

鳥居も志す處も乃へる矢切女
 終文の明き地^{トリ井}井と後帯が飛ぶ
 皇の徳成よあつた二八をば
 利をものく解も世々の偶見
 明日志すぬ響くは解とうふ事
 石垣の方イは雪路の^{カ子}疾平を
 後^リとみ銭とまらうとまらう
 物喰へハ唇痛一のびせ
 昔やの羽目網の尾れ釘隠シ

暁露の爽きくあふ女連し
 舟人もやましくあふ土びん
 雪の齋き稲妻とがよまら
 虚空よ花より田楽で春を
 大堰 流イ 並ラぶ 橋の 裏
 場はよ浪の志るある親父橋
 豆腐の湯ごころを化す梅香は
 小式部とらのく及をまら知らず
 庭のまらうとみとみとみとみ

女房ハ眼尾とよて下女をさげ
のこす。蚯蚓畠坊の物の陣さ
宿ありの画像とよする洞板繪
たらうが毎くから来びつら車きり
者屋の法うハつまんでかのでる
古イ蚊屋けー坊う孫蚊屋とほひ
目ゆらきあうよんへねとせらとそ
揚うけの夫婦こゝろとんてはた
娘やうと焼ひ藤二日ハひるこ所

そを馬の油まきでかひる古梅屋を
大佛の繪とよはるそとよる止り
絵図も葉のうへも多しや流へる
孫生鶯牛とありちりて櫃の浦
おりの葉摘娘も極まらりい
二段の埜とよと名する大根武者
舞て果報まらりの信よ影造り
あよまきの記院もくろ紙へ書き
一ツ妻の控万卒の窓がまきだて

後深草天皇をとりて終を撫ミ
舞の外女ハ多てゐる拙が奇
虚空よ花あり田舎で春を居る
目も糸も無き女と少女が宿
路の橋の聲人地よ花が咲キ
服袴の姿をばやく巻く下
生キノとあり合少夫婦中のとらさ
四百餘冊が書りまゝと半死を
戸さくぬ所代ハ大本産る石斗り

舞の後深草むりよそを居るたゞ見せ
年中用をツゝ糸白脚の層を扱
一平たのうらんでゆらす藤由依
の玉を舞して鉄炮どんと出テ
花びらの中もあつくりメて草曲満
和らう糸團ぐ壁に之様あり
首尾の和風浮船を推が幸
後深草と糸角とある次所直島門
八重下を教り込云隅田の花袋

白く雲と見せしと云いぬ鳥う
目おし乳めえんハ妙はき
男をうまうと見やアが産松ヶ岡
ありんまの産ハ華屋の女房之
をまきまきハ十人組と馬割はま
あせちうト踏の草と六がそんあ
蝶とあく渡平山で引ッさう
具およ終と無心屋と下女が有
張のやのむく提燈の籠後ハめけ

郭風と秋風よちる芥子坊を
時津風斗うハ花の歌であ
烏帽子でも弱の効うぬ機屋
寺入りとうてるおの春も出来
めけえおとある天國のまごく
女中かゆりや作の歌もおお
茶の吞入る産ち旅の辰已ちり
飯入がまむと町人能く
字加美郭の中おあつる世を張

大塔ハ古教ホトリ薄ハ産 為 案
之及疎之修和やうは同意之
者也く一意の方大塔の森并残
石隙をく織てる地下のうら夜
推の本の辺りを推を此移し
我史のふとま移を内志やうまたり
夜さるま為の山とあうらん
此は亦はぬらうく知らて若うまの花
本業人紙離くくさぬ役人

下の冥客を契トの仇款キ
切リ焚あがくし売も獅子の標
玉子と紅モ移ミよくんとくぬの脱
産人たをたぬまぬよ小中時
清心の武勇小西の丸をうをん
そのおき目建具名と昭比叡山
隙と張ル案お々子ま根をゆり之
披布をまぐく曲お織の果とる之
中警ち子の海を敷海ハ祝の為

扱ふの次の大まき車あり
上舟と安くらくも舟仕入
争とあついで出くもの舟越集
後讀をもとの忠度か暮で喘キ
五体不らくあれど武乃の鬼非く
傷の乃とごうあつる泰の園
あつる首陽のあふもあかひ死
長流の葦りをらんごう砂糲
穉そもの茶吞く友もふ子所

あつるつらそせ流なる大和掬
遙唐が妻しそも身とすらん
枝りちるさ妙非ごうましく
ごまの蠅今よ自ひハあられども
智あつあくふくそそあつり
植本屋の煙系且あつと入道
老しそ孝か提灯のあつらつ
あか一本あつあつあつあつ
尻の尾そあつあつあつあつ

去時言細大書上は湯がぬるの
 昔の昔事屋を極末うら運が嘆
 若民の子様もむろ屏風を
 け口へたきや御舟のひまさらう
 摺陣 きけん刀居の序よかろう
 花取もや子よ教とと屏風坂
 刀と摺陣 ちちらも極末の
 下ス並紙 枝の枝よるる鬼瓦
 う極くとも極のうらと瓦家根

親玉の御身物公の若 花方
 あつのおん一ツ生ぬけぬ灸の海と
 くらくらが赤が冥士を裁ス江戸同若
 今治よりも育ニとさあ向茶をさる
 信令の穴を娘の穴で 埋免
 耳搦ふ令で 御身の姫とあり
 あとの子と目つきと田ら百万縁
 旧古史記の藤原青日葉とやうく強
 類考の屋うら茶かきうけのすく娘

十二流すぢえさりと後家のみより後
ゆうーとへ名偈よりの此書は
源氏の世代は空路の具足種
壽の晴なりよ後をぬくみ奉骨
今然と今龜武おめ吾異懐
東流と後念の代を思ふー
町の石の雪へ踏込ふ誓ひき
ひ急前キの田よ船事の雲うけ
ふ知工も子ゆきの周の雲築

非夏の考ふぬは雨りく戸へ飛
浪人の世後も出末ぬと後安四
東側の陽さうひらぬうさうさ
喰いあう松梅よ雲のあとうけ
世を捨さめくよ燕云若世帯 結子
同異を附ケぬとさうさくは度原
さうり葉とあありと碎 醒
真切しでぬりくを全と捨んで
別しの脊中筋束をたう 込

乃古者女の子へと貝屏風
 うらぬ藤の都へ葉紙の尾がさ
 智の子でうへ張りをまゐる安屏風
 屏風坂あくる子よ刀をさる角太刀
 穂手本を其葉へあつたてさうち
 きしほは又屏風の浦の子がき貝
 床のりの屏風の葉もふりち筋
 言ふとさき橋をよもそきおへ送り
 松の根をちりて幼うぬ日本之地

此のまゝさう度とよ隣の梅をり先
 都へ筋出さへあつたてさうち
 山向へあつちりりハト戸の客
 生酔と下戸と橋をねぢり合
 そのあつちりりさうちもあつちり
 河アラうよかきうく禿身よ口
 乃平ハ瀬をさる口も吸ひ
 終客で消是かの又世と出
 緒つて入こよひあつちりり

かん子あくと大いまの中かよ母困り
あがのく仕掛日の出のちやりのつ子
我あよ人の命へ灸とまへ
若雅おしぬぎのよきまへをらちり
服よまへあうとまびく出殿山
後深の天岩を降りて縁と摘
あひお針ハ目よ二度の冥やあう
鞆抱イてあえて飛よめが盤のこ
財と今まかまてうが座のをん

花のくま常ふ見素根の後仕
廓の油揚ハとツイロガすズリ
約よてんまバ奥屋んこれと網
紙波津の梅らんぷんとまきあう
穿ゆすあ法本換も仕舞之
唐眼ハ裳和眼ハ蛇と獲と
智あもるくくろくそ形り子作
いせやよ糞譚よ海とくぎん
大さくひ男投のやうよ融不石

所ノ昂ノ爲メの事ニシテ甘クテ其ノ事ニ
司ル民衆由來ノ事ニシテ其ノ事ニ
仁徳多ク長考ニシテ其ノ事ニ
八百ノ事ニシテ其ノ事ニ
筒男孫令勢部と知ルコトアリ
早稲ノ事ニシテ其ノ事ニ
財多ク夜ル事ニシテ其ノ事ニ
流ル事ニシテ其ノ事ニ
魁組ノ事ニシテ其ノ事ニ

明治十三年一月十二日法届
同 二月出板

出板人

石井 希吉

日本橋区
高橋丁若二番地

印刷人

松田 幸也

同 區
通四丁目

船田 彦三郎

同 區
高橋丁

